

京築ヒノキ製品企画 すくすく

京築地方のヒノキを使って、若い世代が好む家具などの商品開発に取り組み西南女学院大(小倉北区)と西日本工業大(刈田町)の学生の活動が熱を帯びている。西南女学院大生の設定したテーマに沿って西日本工業大生が手掛けた商品について審査を繰り返し、本年度末を目標に試作品などを発表する方針だ。(佐伯浩之)

吉富町内で今月9日に開かれた商品デザインコンペは、ビジネスマンの男性が使う製品がテーマ。西日本工業大生12人がそれぞれ約1カ月かけ名刺入れ、万年筆など12品を提案、西南女学院大生10人が審査した。

審査では、各商品に対し「着眼点がいいが、改良が必要だ」「シンプルで実現性が高い」など意見が白熱。作品のうち高評価を受けたのが「ヒノキノートカバー」だった。ノートや鉛筆、名刺

学生らがデザインコンペ

入れを収納できるバインターだ。提案した河内雄基さんは「実現性とビジネスシーンで使える商品を考えてたら、バインターだった」と話した。

プロジェクトは、京築2市5町でつくる「京築地区森林・林業本年度末にも試作品発表



西南女学院大生らの前で作品を発表する西日本工業大の学生

11日、吉富町

推進協議会」の事業で昨年秋から開始。両大生の感性を生かし、20〜30歳代が求める木工製品を開発して、林業再生を図ることが目的だ。

西南女学院大の高橋幸夫准教授のゼミ生は市場調査を担当。これまでに、福岡市で木製品の購入先などのアンケートを実施した。一方、西日本工業大は石垣充准教授の研究室の学生が西南女学院大のアンケート結果を受け商品開発を担う一方、行橋市内にある西日本工業大職員の縁者の民家を改修し、開発商品の展示場にする。

両大は10月上旬にも、若い世代の家族をターゲットにした「人と共に成長する家具」をテーマにコンペを開く計画。今回のコンペで選ばれた作品を加え、工芸作家に作品の改良などを依頼するという。同協議会事務局の高橋滝夫・県行橋農林事務所林業振興課普及係長は「来年度には製品を完成できるように頑張っている」と期待している。